（別紙6－2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：　医学部 医学科 6年

氏 名：　沼田 文来

授業科目名	「選択実習」 麻酔科

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

5週間の実習で脳神経外科・泌尿器科・一般腹部外科・産婦人科・整形外科を1週間ずつまわり、麻酔導入から術後の抜管、そして回復室への引継ぎまでの麻酔管理を学んだ。マインツ大学医療センターでは診療科ごとに手術室も分かれており、麻酔科医もそれに応じて分かれて従事している。これに伴い、私も1週間ごとに同じ診療科の麻酔管理を見学し、診療科ごとの麻酔の特徴や手技を学べた。学生として見学が主だったが、医療チームの一員として麻酔管理の補佐も積極的にやらせていただき、とても有意義な実習となった。具体的な内容は気道確保、静脈路確保、動脈血ガスの測定と評価、マスク換気、薬品希釈、胃管留置や麻酔準備などである。麻酔担当医や麻酔看護師の熱心な指導により深く麻酔について学び、実践させてもらえた5週間だった。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

現地で実習をして、先生方を含めた医療スタッフ全員がプライベートの時間を大事にしていることが素敵だと思った。街でも多くの子供たちが公園などで父親と過ごす姿を見かけた。ドイツ全体で就業時間内は仕事を精一杯こなし、仕事が終わると家族や友人との時間を楽しむというメリハリのある生活が大事にされており、それは日本とは異なる価値観であり、魅力的だと感じた。また、ドイツでの生活を通して環境への配慮に対する人々の関心が日本より大きいと感じた。ごみの分別も細かく分けられているだけでなく、ペットボトルや瓶のリサイクルも進んでいた。特に飲料を購入する際には容器代が付加されていて、それを専用の機械に返却することでお金が返ってくる仕組みは画期的だと思った。麻酔に関してもヨーロッパ全体として、環境に悪影響を及ぼすガス麻酔の一種が禁止になっており、医療でも環境への配慮が大きいことも印象的だった。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修を通して、私は自分から質問したり行動したりすることのできる度胸がついたと思う。研修前は失敗が怖く、自分から何かを聞くことも挑戦してみることもほとんどなかったが、ドイツ語ばかりが聞こえてくる環境の中で言葉の理解できない自分がより多くのことを学ぶためには自ら行動しなければならなかった。そのため少しでも自分にできることがないか考えて行動し、わからないことは後からでも先生方に質問することで日々知識を身につけていくことができた。日本では受け身での実習が多くなっていた自分にとって、自ら行動して学ぶ姿勢を身につけられたのは大きな成長だったと思う。また医学英語も苦手意識があったが、渡航前に自学したおかげもあり実習中は先生方からの説明も概ね理解することができた。しかし、単語を理解できても自分の質問や考えを明確に英語で伝えるのには苦労した場面が多々あり、語学力を高めたいと強く思うきっかけにもなった。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

今回の実習で麻酔について学べただけでなく、日本との医療制度や医師の働き方、そして学生の学び方の違いにも気づけた。特にドイツの医学生は自分たち以上に患者に接する機会が早くから設けられており、手技も積極的に行っていた。またEU圏内であれば留学しやすい環境が整っており、多くの学生が留学し、より良い医療について考え、英語で意見を伝えていた。日本で同様の制度を設けるのは困難だが、まずは自分の気づきを周りに広めることで留学に興味を持つ人が増えたらいいと思う。そして自分自身は地域社会の発展に寄与するために語学力を磨き、より多くの情報を日本に限らず海外からも取り入れられるような医師を目指したい。

（別紙６－２）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）：医学部　医学科　6年

氏 名：沖田若菜

授業科目名	選択実習　麻酔科

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

マインツ大学での5週間にわたる実習では、脳神経外科・整形外科・産婦人科（小児外科）・一般腹部外科・泌尿器科での麻酔についてそれぞれ1週間ずつ学んだ。術中モニターの装着やルート確保、気道確保、胃管挿入、薬剤の調整、血ガス分析、ストレッチャーの移乗など基本的手技を見学・実践することができた。また一つの手術に最初から最後まで参加することができ、手術の全体像の理解を深めた。1週ずつのローテンションで各科を回るため、1週間の間にブロック麻酔や仙骨硬膜外麻酔、局所麻酔のみでの手術などそれぞれの科特有の麻酔方法について学びを深めることができた。先生方をはじめ看護師さんや現地の学生さんとも英語を使って説明して頂いたり、会話をしたりと交流を深めて有意義な実習を過ごすことができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

第一言語が英語ではない国に長期間滞在することは初めてだったが殆どの方と英語で会話でき英語の重要性や必要性について改めて感じた。ペットボトルのリファンドが様々なところに設置されている、スクターシェアや自転車移動、トラムの移動など車以外の移動手段が浸透しているなど、普段の生活の中でも様々な面で環境への興味の高さを垣間見ることができた。さらに麻酔科という点からも、日本ではよく使われているデスフルランは環境破壊につながるため全面禁止になっているなど、どの先生に聞いても熱く語って下さるほど一人一人の環境への意識の高さを感じた。さらに麻酔準備室の活用など労働効率を高めてプライベートの時間を大切にする、といった労働への意識の違いを感じこれからの日本でも必要だと考えた。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

今回の研修を通して最も影響を受けたのは現地の学生の意識の高さだった。ドイツの学生は医療スタッフの一員として自ら積極的に動いていて、日本での見学中心の研修との違いを痛感した。はじめの方は慣れない環境ということもあり積極的に動けずにいたが、徐々に輸液の交換やBISモニターの装着など簡単な作業は自分から率先して行動することができた。またコミュニケーションにおいても成長を感じることができた。スタッフ同士の会話はドイツ語で、医療英語も勉強不足で分からないことも多かったため当初は尻込みしてしまっていた。しかし学生の意識の高さに触れ、積極的に質問し、分からないことは分かったふりをせずに理解できるまで説明してもらうことができるようになった。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

今回の研修中に“EU圏内の提携施設であれば学生の授業受講や研修医の研修を好きなところで行うことができる“と聞いた。このように自分が所属する場所に固執せず、他の病院、県外、国外にも目を向ける姿勢を持つことで自分が所属する地域社会でも新たな視点を提供することができると感じ、今後も国内はもとより国外での学会や留学などにも積極的に参加していきたいと考えた。また医療の面からはドイツでの医療がいかに効率的かを実際に見て、医療スタッフの人手不足が問題になっている日本の地域医療でこそ効率の良さが重要だと考えた。例えばリカバリールームの活用は限られた人員で多くの患者さんを救う仕組みだと感じた。このように固定概念に縛られず新たな仕組みなどを取り入れていく姿勢も大切にしていきたい。

（別紙6－2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

【研修参加者】

所 属（学部（研究科）・学年）: 医学部医学科6年

氏 名: 中原愛水

授業科目名	選択実習（麻酔科）

1．研修先での学習内容及び自身の学習成果について記載して下さい。（250～300字程度）

研修先では、脳外科、泌尿器科、産婦人科、整形外科の麻酔科で実習を行った。実習内容としては、担当の麻酔科の先生につき、患者さんへの麻酔の説明、患者さんの搬入、麻酔の導入、手術中の麻酔管理、術後の抜管、リカバリー室への搬送といった、麻酔科医が行う一連の業務に携わった。実際に、マスク換気や気管挿管、胃管挿管、ルート確保、血液ガス採取、血液型判断、薬剤調整、抜管など様々な手技も経験することができた。また、麻酔の基本的な内容やベンチレーターの仕組み、手術内容について、英語で先生方が丁寧に説明して下さった。帰宅後、その日に学習したことの復習や、そこから派生して気になったことを調べることで、より知識を深めることができた。1か月の研修を通し、麻酔学、生理学、医学英語の知識を重点的に強化することができた。

2．現地での生活を体験して得た気づきや学びを記載して下さい。（250～300字程度）

ドイツは公用語がドイツ語であり、病院内含め、日常生活で耳に入ってくる言葉や、町中で見る言葉はほぼ全てドイツ語だった。ドイツ語は全くわからなかったので、意味を理解できず、不安を感じることも多々あった。そんな中で英語という手段でコミュニケーションが取れた時はとても安心し、英語の重要性を改めて感じた。また、今まで鹿児島大学の留学生と関わる機会があったが、この留学を通し、彼らの気持ちを、よく理解することができた。英語でコミュニケーションをとることに少しハードルを感じることもあったが、これからは、もし困っていそうな外国の方を見かけた時などは自ら声をかけてみるなどの行動をとろうと思った。

3．研修前と後での自身の変化や最も成長した経験について具体的なエピソードをもとに記載して下さい。（250～300字程度）

研修の前後で、チームのために自ら行動する姿勢を身に付けることができた。最初の頃は、ドイツ語での指示が飛び交う中で、自分がどのように立ち回るべきかわからず、迷惑をかけてしまうのも怖く、何も行動できず、ただ医師や看護師の動きを理解するだけで精一杯だった。しかし、徐々に慣れてきて、次どのように動けばいい、わかってきたら、医師や看護師から指示をもらい、補助に入ったり、自ら仕事を探したり、手術室のチーム一員としてできることを徐々に増やすことができた。また、手技などをさせてもらえる機会もあり、最初は怖くてドキドキしたが、分からないことはしっかり医師に確認しながら、少しずつコツをつかむことができた。失敗を恐れすぎずに挑戦することの大切さと、積極的に行動することで学びや経験を増やすことができることを身をもって経験した。

4．地域社会の発展に寄与するため、今後取り組んでいきたいこと、自身の目標について記載して下さい。（250～300字程度）

鹿児島の医療における発展のために2つの目標を掲げる。1つ目は、医学英語、英語でのコミュニケーション力の向上だ。鹿児島に住む・鹿児島を訪れる外国人は増加している。彼らが少しでも安心して医療機関を受診できるように英語での診察対応可能な医師になりたい。2つ目は、ドイツの麻酔の流れや医療体制などで良い点・悪い点を、多くの医療従事者に共有することだ。それにより、日本の医療資源の節約や手術時間の効率化の改善に貢献したい。また、医師はじめ医療従事者の働き方も日本とは異なり、QOLが高いように感じた。その点もまずは鹿児島から広めていきたいと思う。